

シリーズ「COPD(慢性閉塞性肺疾患)②

COPDに関係する呼吸機能検査

独立行政法人国立病院機構 和歌山病院

研究検査科 医化学主任 宮本 勢子

COPDのガイドライン 場合にCOPDと診断されることについて、呼吸機能検査

で正常に覆すことのない気流閉塞を示す「1秒量」が挙げられています。はじめに出てきた「呼吸機能検査」とはどんな検査なのでしょう。かゝる場合は「COPD」に関する呼吸機能検査」についてお話しします。

呼吸機能検査とは指示通りに機械を通して呼吸する事により「呼吸器疾患の有無」や「病気の状態」「治療の効果」が判る検査で、呼吸器診療において重要な検査の一つです。

COPDでは画像診断等の検査や症状と併せて、強制呼出曲線(FVC)と一言で呼吸機能検査で診断・病態を判断します。「一気に吐き出し始めてから1秒間に吐いた実際の量(1秒量)」が「限界まで吸って一気に吐き出し切った量(努力性肺活量)」に対する比率(1秒率)を調べる事で、気道の狭窄の有無・程度、つまりCOPDに罹っているかどうかを判断します。気管支を広げる薬を吸入した後に測定した1秒率が70%未満の

関心を持っていただく事「その存在に気付いていない人が多い病気(特にCOPD)に対する予防と自覚を促し、治療の重要性を理解していただく事」が目的で作られました。算出した肺年齢が、実年齢より若い場合は、呼吸機能(肺の健康状態)が良好であると判断し、実年齢より高い場合は、COPDを含めた肺疾患の存在が疑われる為、専門医の受診を促します。

COPDの主な症状に「慢性的に咳・痰が出る事」ちよつとした運動や日常生活で息切れを感じること「が挙げられます。これらの症状は初期の段階では呼吸機能が低下しているにもかかわらず自覚されにくいです。自覚症状が強くなってきた時には病状がかなり進んでいます。一度破壊された肺組織は元に戻らない事から、病気の進行を食い止める、症状・生活の質を改善する為にも早期発見・早期治療が非常に大事です。

このように肺の状態を分析する呼吸機能検査ですが、病院で使用する項目・数値を健康状態の把握に活用するには少々難しいです。そこで考え出されたのが、『肺年齢』です。

『肺年齢』は、肺の状態を「肺年齢」という形で表して、実年齢と「同性・同年代の平均との比較から算出した肺年齢」との対比から、肺の健康状態を簡単に把握できるように提唱された指標です。「多くの人に肺の健康へ

呼吸器疾患に関する検査の中でも、呼吸機能検査・肺年齢が最も早い段階でCOPDの影響を反映します。呼吸機能検査・肺年齢を調べることはCOPDの早期発見に繋がります。症状を自覚されている方は勿論のこと、肺の健康状態に自信をお持ちの方もぜひ検査を受けられる事をお勧めします。